

麦作

「北海道 麦作りに挑む人々」その10

名寄市風連町豊里 ^い伊 ^{とう}藤 ^{たか}貴 ^{よし}美

1. はじめに

上川総合振興局は、主な振興局における秋まき小麦（以下、小麦）の反収（22～28年までの最高、最低を除いた5年平均）では中位にある。

伊藤氏が住む名寄市風連地区は、緩やかな棚田地帯が広がり、石礫もあり土質は重粘土で透・排水性に苦勞する地帯であり、深根性の作物である小麦栽培にとっては、厳しい土壌条件といえる。（図1）

また、北限に近い水稻栽培を克服するため、昭和54年にもち米団地として指定されて以来もち米を中心に栽培している。

借地を含めて約50haの面積に、比較的土壌条件の良い半分の面積に大豆・小麦を栽培し、昨年、一昨年とも秋まき小麦で9～10俵、春まき小麦でも7～8俵台と地区平均収量を上

回っている実績を持つ。今後とも水田転換作物として、また、農業経営にとっても重要な作物として位置づけている伊藤氏の小麦栽培について紹介する。（写真1 伊藤氏）

2. 地域の特徴および経営概要

(1) 名寄市の気象および土壌条件

名寄市は、夏の最高温度39.3度、冬の最低温度は-38.5度と寒暖差が激しく、冬以外でも盆地特有の昼と夜の寒暖差が大きい気象が特徴である。その寒暖差が作物のでんぷん蓄積にとっては好都合となり、特に、糖度の高さを要求される果実などには良い生育環境となっている。加えて、病害虫の発生も抑制されることから減農薬にも好適と思われる。

（図2、3）

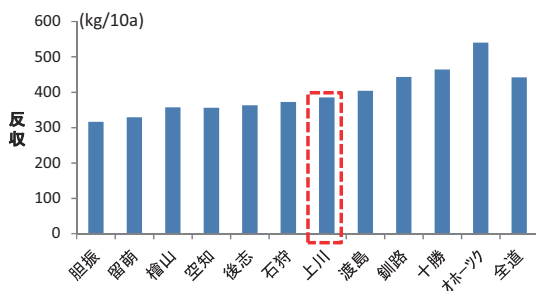


図1 主な振興局の反収

(H22～28年 7中5)

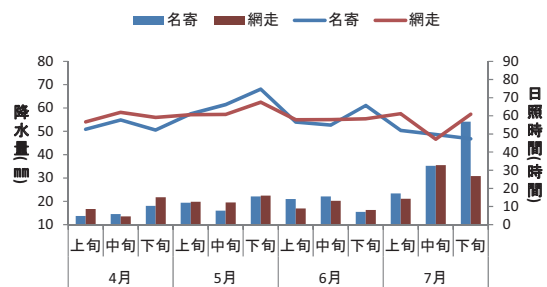


図2 2地区の降水量と日照時間の比較

(アメダス1981～2010年の平均)

左、棒グラフ～降水量、右、折れ線～日照時間



写真1 伊藤氏

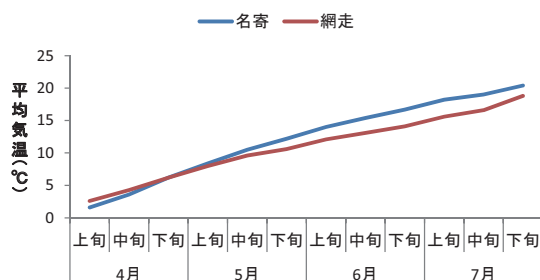


図3 2地区の平均気温の比較

(アメダス1981～2010年の平均)

表1 作付割合 (H29年)

作物名	品 種	作付面積 (ha)	作付割合 (%)
水 稻	風の子	24.2	49
(内加工米)	〃	1.5	-
秋まき小麦	きたほなみ	1.0	2
春まき小麦	春よ恋	7.0	14
大 豆	ユキホマレ	17.0	35
合 計		49.2	100



写真2 義祖父が寝室の窓から眺めた田んぼ

(2) 経営規模と作付け構成

家族は、91歳の義祖母を筆頭に義父母と伊藤氏（40才）と奥さん、そして小4・小1年（いずれも男子）の7人家族で、昨年新築したての家に4世代で暮らす。

面積は、借地を含めて49.2haで水稻+畑作の複合経営である。作物は、水稻（もち米・加工用米含む）、春まき・秋まき小麦、大豆を栽培している。各作物の面積は、表1のとおり。

3. 小麦栽培の経緯

(1) 義父が農業を始めたきっかけ

義祖父母は、水田を中心とした農業を現在地で営んでいた。しかし、義祖父が58才の年に頸椎損傷の事故に遭遇し、四肢が動かず寝たきりとなってしまった。義祖父は、義父に対して農業を継いでくれとは言わなかったこともあり、学校を卒業後農業とは無縁の家具屋さんに就職した。

結局、義祖父の怪我がきっかけとなり、元々農業は嫌いだったという義父が農業を継ぐことになった。義父30歳の時であった。

農業の経験が無かったこともあり、2年くらいは田んぼを休耕させて牧草（白クローバー）を播いていた。しかし、寝たきりの義祖父に窓越しにでも稲穂を見せて、喜ばせて上げたいとの思いから水稻を復活させた。小麦を栽培し始めたのは、その2年後位からだと言う。（写真2）

以来32年間、義祖父から引き継いだ耕地面

積4.7haを30年余りで10倍にまで規模拡大し現在に至っている。

(2) 本人が後継者となった経緯

伊藤氏は、農業を始めて7年目となる。それまで、ご夫妻とも保育士の資格を活かしながら、名寄市にある福祉施設に勤めていた。

奥さんとの出会いは、東川町にある福祉専門学校同期生であることがきっかけで、職場も一緒であったことによる。

伊藤氏は、帯広市出身で農業の経験は全くなかった。しかし、仕事の合間に奥さんの実家を手伝っていたことが農業との出会いであった。

28才の時に、一度義父から農家をやってみないかと誘われた。その時には奥さんの反対もあり、後継者となる決断はできなかった。しかし、なぜかその誘いは嬉しかったという。それから5年後、徐々に農業に魅力を感じ、「やっても良いかな～」と言う思いになって後継者となる決断をしたという。伊藤氏33才の時であった。

それ以来、義父に叱咤激励を受けながら今年の1月1日から経営を委譲されることになった。

(3) 収量・品質

伊藤氏の3年間（平成26～28年産）の平均反収は、545kg/10aと市平均の1.5倍と高い。3年間の製品歩留り率の平均では90.6%となっている。（図4）平成28年産の小麦品質評価項目では、1等Aランクの格付けと

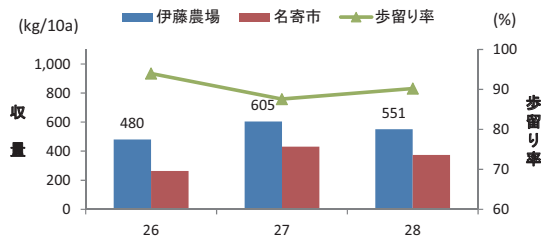


図4 伊藤農場と名寄市との反収と歩留り率の推移

なった。

4. 技術の特徴

(1) 早くから初冬播きに挑戦

試験場や普及センター等の支援を受けながら、この地帯としては最も早くから春まき小麦の初冬播きに取り組んだ。春まき小麦が安定してとれるのは、その成果だと思っている。

しかし、昨年は10月下旬に根雪となり、雪の上から播種せざるを得なかったため、茎数が思うように確保できず、一部廃耕となり春まき小麦の再播となった。そのため今年の収量は余り期待できそうにないと言う。しかし、春まき小麦圃場を見る限りでは、手入れが行き届き、そう悪くは感じられなかった。(写真3)

(2) 大豆間作小麦を活かす

水田転換畑は、大豆と小麦の2作物なので、大豆間作小麦も早くから取り組んだ。ただ、播種作業は、ブロードキャストによるのでムラが生じ、また、茎数管理も難しいことが当面の課題となっている。



写真3 春小麦

(3) 徹底した機械共同所有と共同作業

義父曰く、「個人所有は、自家用で使うミスト機と母ちゃんくらいのもんだ」という程、当初から機械・施設の共同所有を徹底している。しかも、所有する機械や作業は、それぞれ構成員が異なる。一人ひとりの農家が抱えている様々な事情により、結果として現在の構成員になっている。

一例を挙げれば、以下のような機械の所有と作業である。

- ① 水稻の育苗と田植え機は、2軒の共同所有と作業
- ② 水稻の収穫作業は、水稻専用の自脱型コンバイン2台を5軒共同で所有し作業も共同
- ③ 麦・大豆の収穫作業は、普通型コンバイン4台、(今年から1台追加)を10軒で所有。特に、この作業は、近隣の農家の受委託も引き受けており、カバー面積は、70～80haになっている。その内、員外は50haである。

この他にも、トラクタや管理機などの共同所有があり、D型ハウスなどにキッチリと収納されている。(写真4)

ちなみに、管理作業は、個々に任されている。

(4) 播種量は5kg/10aと少なめ

春まき小麦後の秋まき小麦の播種量は、5kg/10a前後と少ない。そのためには9月10～15日までには必ず播種している。

当初、播種量を減らすことには、不安も



写真4 整然と並ぶ機械格納庫



写真5 収穫間近の秋まき小麦

あったが現在はその不安から解消されている。播種期を早めにして播種量を少なめにする方が、越冬前にしっかりとした株を作って越冬できることから、倒伏もなく安定してとれることを実感しているからだ。(写真5)

(5) 経営管理の徹底

義父は、「仕事はやっていれば、いずれは慣れて会得できるが、カネの出し入れだけは自分のアタマで考えなければ、経営管理できない」という。このことから、早めに経営を任せた。

その前段として、昨年からパソコンによる複式簿記ソフトのソリマチを利用して経営管理に取り組んでいる。特に、共同での機械装備や施設が多いのでカネの出し入れは、個人経営の何倍も気を遣うとのことである。

5. おわりに

義父曰く、「鬼瓦権造」のような強面に写るが、根は優しいよとニヤッと笑った。確か

に、義祖父の事故がきっかけで脱サラして好きでなかった農業後継者となった。その後、父に稲穂を見せたくて経験のない水稻を栽培した。父から引き継いだ面積を、30年余りで10倍にまで規模を拡大した。地域の人達と機械の共同や作業の受委託を長年続けてきた。娘婿である貴美氏を後継者として受け入れた。

この基盤を築くには、地域や家族の協力なしにはなしえなかったと思われる。また、地域と歩調を合わせ、家族をまとめるには、それなりの優しさがなければできなかったと想像できる。

後継者となって経営を委譲されたが、これまでの義父の経験を土台にして前に進みたいと願っている。

<伊藤氏のコメント>

福祉施設に勤めていた頃は、月7～8回の夜勤があつて生活が不規則だった。しかし、農業は、「明るくなったら起き、日が暮れると家に入る」という規則正しい生活が出来、健康に良いと感じている。まだまだ、学ばなければならないことが沢山あるが、今後も貪欲に学びたいと話していた。

(文責 北海道米麦改良協会 高橋義雄)

*「鬼瓦権造」は、ビートたけしが「オレたちひょうきん族」の中で演じた代表的なキャラクターの名前。